

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520803

研究課題名(和文) ワクフ制度の理念と現実

研究課題名(英文) Theory and Practice in the Waqf

研究代表者

伊藤 隆郎 (Ito, Takao)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：60464260

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、エジプトとシリアにおけるワクフ(寄進・財団)制度の理念と現実の相関を、マムルーク朝時代(1250-1517年)を中心に明らかにし、ワクフ研究、さらには公益や福祉に関する比較史研究を展開していくことに寄与することを目指すものである。具体的には、次の3点について研究を行った。(1)主に文書史料に基づくマムルーク朝時代ワクフの事例研究、(2)ワクフ経営の変遷の長期的な追跡、(3)ワクフの諸問題とそれらについての議論及び影響の解明。この研究期間中にいくつもの文書史料を「発見」し、特に研究項目(1)で大きな成果をあげることができた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to contribute to the waqf (endowment, fund) studies and also to a comparative historical research on charity, philanthropy, and public welfare through examining the correlation between theory and practice concerning the waqf in late medieval Egypt and Syria, especially in the Mamluk period (1250-1517). The study has three subtopics as follows: (1) case studies of the waqfs founded in the Mamluk Sultanate, mainly based on archival sources, (2) long-term follow-up of the management of some endowments, and (3) investigation of legal discussions about problems of the waqf as well as their impact on theory and practice. I have 'discovered' some documents to which little attention had been paid so far. My study has thus proved successful, particularly in the subtopic (1).

研究分野：アラブ史

キーワード：ワクフ マムルーク朝 オスマン朝 エジプト シリア イスラーム法 アイユーブ朝 公益

1. 研究開始当初の背景

ワクフ(寄進・財団)は、イスラーム世界(イスラーム教徒が支配者で、イスラーム法が施行されている地域)特有の制度として国内外で近年最も活発に議論されているテーマのひとつである。マムルーク朝時代(1250-1517年)についても同様であり、数多くの研究がなされてきたが、なお残された問題も少なくない。

最も重要な課題の一つは、ワクフの個別事例を精査したケーススタディを進めることである。先行研究の多くは、例えば救貧を論じるために、任意の複数のワクフを取り上げるが、各ワクフの一部(例えば運営規定)のみを検討対象とし、それ以外の要素(設定者、対象・目的、財源)を捨象しており、一面的な議論にとどまっている。個別ワクフについての詳細なケーススタディを積み重ねながら、マムルーク朝時代ワクフの具体像と特徴を明らかにしていかななくてはならない。

第二の重要課題は、こうして設定・設立されたワクフが、その後実際にどのように経営され機能したのかを長期にわたって追跡し、明らかにすることである。

第三に、ワクフの法制面に関する研究である。ワクフに関してさまざまな問題が起こり、ワクフ法の解釈・運用に影響を与えていたことは知られているが、具体的なことは十分に明らかにされていなかった。

2. 研究の目的

本研究は、エジプトとシリアにおけるワクフ制度の理念と現実の相関を、マムルーク朝時代を中心に明らかにし、ワクフ研究、さらには公益や福祉に関する比較史研究を展開していくことに寄与することを目指すものである。具体的には、次の3点について研究を行った。

(1)文書史料に基づいたマムルーク朝時代ワクフのケーススタディを進める。

(2)ワクフ経営の変遷を長期的に追跡する。

(3)ワクフの諸問題とそれらについての議論及び影響を明らかにする。

このように本研究は、(1)と(2)において、一方でワクフ設定者の意図や運営規定等のワクフの理念に関わる面、他方で時代背景や実際の経営といった現実面について検討し、(3)でワクフの法理論と解釈・運用との間の関係を考察する。

3. 研究の方法

マムルーク朝時代を中心にエジプトとシリアにおけるワクフ制度の理念と現実の相関を多角的に明らかにするために、上記3点の項目を並行して研究した。その際、いずれの項目についても、諸外国の図書館・文書館に所蔵される未公開のアラビア語史料を調査・開拓し、それらとともに収集したその他の諸資料を読解することによって研究を進めた。

4. 研究成果

各研究項目における成果は次の通りである。

(1)シカゴ大学図書館(アメリカ)、ボドリアン図書館(英国)での調査などにより、これまでにほとんど知られていなかった文書を複数「発見」した。

例えば、マムルーク朝スルタン=バルスバーイ(在位1422-38年)のワクフ設定文書集をシカゴ大学図書館とゴータ研究図書館(ドイツ)で「発見」した。中でもゴータ研究図書館所蔵の文書集は、これまでに誰もその存在を指摘したことがないものである。現在、これら2点の文書集と、以前に入手していたエジプト国立文書館所蔵のワクフ設定文書集、既刊のワクフ設定文書集梗概(エジプト国立図書館所蔵)を比較検討しており、1年以内に成果をまとめて公表する予定である。

また、既に1949年に校訂出版されているにもかかわらず等閑視されてきたアイユー

ブ朝（1169-1250年）末期ダマスクスの知識人兼商人イブン・ムナッジャーのワクフ設定文書を取り上げて検討し、シリアではエジプトと違って早くから都市周辺の農地のワクフ化が進んでいたことなどを新たに指摘した。同様に、1958年に校訂出版されながら、ほとんど忘れ去られている15世紀初頭ダマスクスの商人イスアルディーのワクフ設定文書を最近入手したので、近くその検討に取り組む。

さらに、シカゴ大学図書館で入手したマムルークの娘のワクフ設定文書集、ボドレイアン図書館で「発見」した13-14世紀ダマスクスに関するワクフ文書の断片、既刊ではあるが等閑視されているスルタン=ガウリー（在位1501-16年）の孫娘ファティマのワクフ設定文書を現在検討中であり、いずれもその結果を今年中に論文にまとめるつもりである。

(2)以上の諸研究はいずれもこの項目にも関わるが、特筆すべきは、ムナッジャー家の歴史を7世代、200年にわたって追跡したことである。その結果、論文において、ムナッジャー家からそれだけ長期間、伝記集に名前が載せられる人物が輩出したのは、彼らが設定したワクフのおかげもあったのではないかと指摘し、ワクフ財の多くが「短命」であったとする見解に疑問を呈した。

(3)ワクフの諸問題に関する、マムルーク朝末期を代表する知識人スューティ（1445-1505年）の見解を明らかにした。彼は自分の理想に忠実に生きようとし、同僚やスルタンとの間で軋轢を生むことも多かったが、単純に理論を現実に適用したわけではなかった。ワクフの諸問題についても、現実的に柔軟な対応している。例えば、国有地の寄進をイルサードやイフラーズと呼んで、私財の寄進であるワクフとは区別しつつ、正当

化した。

ワクフの分類といえば、その対象・目的の性格の違いによってワクフを「慈善ワクフ」と「家族ワクフ」に分けるのが通説であるが、私は以前からこの二分法はマムルーク朝時代には一般的ではなかったと考えている。今回、スューティもこの二分法に則っていないことを確認でき、意を強くした。残る課題のひとつは、「慈善ワクフ」と「家族ワクフ」という二分法がいつ頃から、なぜ一般的になったかを解明することである。

以上、研究期間中にすべての成果をまとめて公表するまでには至らなかったが、特に項目(1)において大きな成果をあげ、国内外のワクフ研究の進展に貢献することができた（できる）と思われる。

今後の課題は、第一に、現在検討中のワクフ文書（集）4点に関する論考を早急にまとめて発表することである。第二に、この間に政変があったために結局行くことができなかったカイロ（エジプト）で資料調査を行うことである。それにより、さらに新史料を発見することができるかもしれない。

また本研究を行っている間、マムルーク朝に著されたアラビア語の年代記・伝記集など叙述史料を精査する中から、マムルーク朝の歴史叙述に関する研究でも付随して成果をあげることができ、今後はこのテーマでの研究を進めるつもりである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4件）

1. Takao Ito, “Al-Maqrīzī’s Biography of Tīmūr”, *Arabica*, 査読有, 62 (2015), pp. 308-327.
2. 谷口淳一、伊藤隆郎ほか「イブン・ファドルア

ッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』6』『史窓』, 査読無, 72 (2015), pp. 63-79.

3. 谷口淳一、伊藤隆郎ほか「イブン・ファドルアッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』5』『史窓』, 査読無, 71 (2014), pp. 1-24.

4. 谷口淳一、伊藤隆郎ほか「イブン・ファドルアッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』4』『史窓』, 査読無, 70 (2013), pp. 31-49.

〔学会発表〕(計 5 件)

1. 招待講演・伊藤隆郎「トプカブ宮殿博物館付属図書館所蔵アラビア語写本 (Ahmet III 3057) に関する覚書」, 羽田記念館講演会 (京都府), 2015.12.12.

2. Takao Ito, “A Damascus Scholar’s *Waqf* Document and His Family History”, Between Saladin and Selim the Grimm: Syria under Ayyubid and Mamluk Rule, ボン (ドイツ), 2015.7.11.

3. Takao Ito, “A Compendium of Histories of the Mamluk Sultanate’s Syrian Borderlands: Some Notes on the Manuscript Ahmet III 3057 (TSMK, Istanbul)”, 2nd Conference of the School of Mamlūk Studies, リエージュ (ベルギー), 2015.6.25.

4. Takao Ito, “The Early Ottomans in Mamluk Historiography”, 日本中東学会第32回年次大会, 同志社大学 (京都府), 2015.5.15.

5. Takao Ito, “Al-Suyūfī and Problems of the *Waqf*”, 1st Conference of the School of Mamlūk Studies, ヴェネツィア (イタリア), 2014.6.23.

〔図書〕(計 3 件)

1. Takao Ito, “A Damascus Scholar’s *Waqf*

Document and His Family History”, in a conference volume on Between Saladin and Selim the Grimm: Syria under Ayyubid and Mamluk Rule, under review, 2017?

2. Takao Ito, “A Collection of Histories of the Mamluk Sultanate’s Syrian Borderlands: Some Notes on the Manuscript Ahmet III 3057 (TSMK, Istanbul)”, in a conference volume on the Mamluk Sultanate and Its Periphery, under review, 2017?

3. Takao Ito, “Al-Suyūfī and Problems of the *Waqf*”, *Al-Suyūfī, a Polymath in the Mamluk Period*, ed. Antonella Gherseti, 査読有, Leiden: Brill, in press., 2016.

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 隆郎 (ITO, Takao), 神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号: 60464260

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: